

年次 報告書

2019-2020



日英学生会議

UK-Japan Student Conference

www.uk-jpstudentconference.com

日英学生会議の理念: 本年度のテーマ

Madalina Benderschi

Gabriel Figueiredo

Kanako Hara

Eliana Harrigan

Mizuho Ina

Haleigh Kling

Ayaka Naota

Momoko Tajima

An Yokota

2020年11月

uk.jp.student.conference@gmail.com
www.uk-jpstudentconference.com

Contents

日英学生会議の理念

本会議のテーマ

プログラム構成

イベント

ロンドンイベント

東京イベント

事前学習

セミナー

文化交流

ワークショップ

政策立案

プレゼンテーション

コミュニティプロジェクト

ソーシャルメディア

開催要項

開催スケジュール

事前学習

第一回事前学習会

第二回事前学習会

ダン・ミッチェル氏による講義

サシャーハスナイン氏による講義

- アデリン・ジョン・パトラ氏による講義

メリル・シンガー氏による講義

有村俊秀氏による講義

ヴィーガン・トーキョーによる講義

ザキヤ・マッケンジー氏による講義

映画鑑賞会—2040

パトリックライドン氏による講義

ルートH、GLCとの共同イベント

ロマン クルツナリック氏による講義

会議の詳細

主催者

参加者

終わりに

日英学生会議の理念

日英学生会議は、日本と英国の将来の担い手である学生同士の交流と議論の場を提供することで、両国の学生が社会で活躍する際に礎となる人脈形成を支え、日英間の交流を活性化させたいと望んでいます。一期一会の出会いを大切にし、学生時代に築いた絆は、将来に渡る宝です。また、そのような交友関係は、人生や価値観に大きな影響を与える可能性を秘めています。日英学生会議は、日本やイギリスというそれぞれ内部で完結しがちなコミュニティーを跨ぎ、こうした「出会い」の架け橋としての役割を担っています。

私たちは、異なるバックグラウンドを持つ学生同士が議論することを通じて、潜在意識に眠る自分の先入観や偏見を問い、多角的なアプローチに気づく、という体験を重視しています。この体験は、国境を超えた舞台上で幅広い視野を持って議論できる個人の形成にとって、かけがえのないものです。私たちは自由闊達にとことん語り合うというこの風土を、会議期間・会議場内に終わらせず、是非とも学生各人に自国のコミュニティーに持ち帰ってもらい、こうし

た「気づき」の体験を日英学生会議の外に伝えていきたいと考えています。私たちは、「自由闊達な議論」→「気づき」→「アウトプット」というプロセスのモデルとして、日英学生会議を位置付けることを志しています。

日英学生会議は、日本とイギリスにおける、グローバルな視点を持ち、政治や社会への関心が高い学生が一同に集う、希少な機会をお届けします。日英に大国の将来を担う学生たちが、アイディアを共有し、持続的な社会の実現に向けてのヴィジョンを提言するという営みは、それにより得られる知見や、次世代のリーダー育成において、両国の将来にとって貴重なものです。日英両国の学生という、これまでなかった視点を開拓することは、次世代を見据えた政策や取り組みの構想が芽生える土壌となり得ます。この新たな価値を十分に活かすべく、私たちは学生会議の成果を公表し、フィードバックを通して、社会に還元いたします。私たち日英学生会議は、日英間の豊かな交流と議論の源泉となることを願っています。



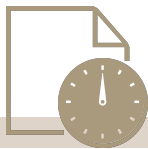
本年度のテーマ

2020年度の日英学生会議では、現代社会の危機である、気候変動の問題に取り組みました。我々は、日英両国の気候変動の原因と各国の具体的な対策についての異文化理解を促進しました。日本は京都議定書の締結にあたり、世界のモデルとなる新しい経済社会づくりに挑戦してきました。一方で、英国では気候変動緩和と適応の政策を打ち出し、英政府は「気候緊急事態」を宣言しました。両国は、パリ気候協定で炭素排出量を削減することを約束していますが、多くの人々がこれらの政策は不十分であると主張しています。本会議では、問題の根源と現存する対策を分析し、実行可能な代替案を探求しました。

個人、地域、国家、世界の全てのレベルで気候変動に対処する効果的な方法を探求することを本会議の最終的な目的としました。この機会に、我々は社会科学と地球科学の教授、芸術家、活動家、哲学者を特別講師として招き、気候変動についての考えを構築しました。歴史的・文化的背景、そして国内の問題や状況をより深く分析することにより、両国が地球環境政治の将来にどのように取り組むかについて、より明確な理解が浮かび上がりました。

プログラム構成

日英学生会議は、異なるバックグラウンドを持つ両国の大学生または大学院生が多角的なアプローチから意見やアイデアを共有し、幅広い視野を持って思考力を高めることを目標としています。この過程で自由闊達な議論は極めて重要です。そのため、我々は、参加者全員が積極的に議論に参加し、セミナーやワークショップ等を通して得た学びを発信できる環境づくりに努めました。



事前学習セミナー

参加者全員が気候変動の現状に対する一定の理解力。積極的に議論に参加する力、論理的に物事を考える力、そして自分の意見を構成する力を育むことを目的としています。本会議前に合計2回の事前学習会を実施しました。



セミナー

学術的な視点からインプットを行うことがセミナーの目的です。セミナーで得た知識や見解は他のアクティビティでも基礎知識として非常に生かされ、現状に対するより現実的な対策を考える上でも参考になります。参加者によるディスカッションやプレゼンテーションの構成要素として機能する重要な場を提供します。各セミナーの後には質疑応答の時間を設け、対話形式で行いました。



文化交流

日英学生会議は、参加者が長期的な関係を築くのに役立つ相互理解によって、学術的経験をサポートします。文化交流では、お互いの背景を学ぶ上で非常に重要な役割を果たします。ここでは、気候変動の文化的に異なる描写と活動の認識を探索を主に行いました。



ワークショップ

参加者がグループでの調査とデータ分析に積極的に貢献する相互交流的なセッションです。ワークショップでは、参加者と講演者の間でディスカッションをする機会が度々あります。ディスカッションでは、学びから得た情報交換や新しい見解の共有をするために協議するといった意味合いがあります。学生らしいウィットに富んだアイデアが多いため、自らの考えを発展させ、新たな視点から考える手立てとなります。



政策立案

政策立案は現在の気候変動の政策を分析し、その結果として新しい政策を専門家以外にもわかりやすく提案するアクティビティです。政策立案は（１）現状と問題（２）解決策の機能性と必要性（３）適応性（４）まとめの４つの項目に分けて行います。参加者各自は会議を通しての学びを深め、主要な論点と解決法を引き出すことに挑戦します。



プレゼンテーション

プレゼンテーションは、本会議での学びのアウトプットを試み、会議を締めくくります。セミナーやワークショップで形成された見解や意見を発言し、問題提をし、その問題に対する実行可能な解決策を提案します。



コミュニティプロジェクト

本会議では、初の試みとなる『コミュニティプロジェクト』を発動しました。参加者が政策立案を超えて、実際に変化を起こすよう促すプロジェクトです。オンライン会議の開催により、コストが削減されたため、余剰資金を有意義なコミュニティプロジェクトのスポンサーに振り分けました。参加者は、地域社会の気候変動を緩和するプロジェクトを提案し、成功した提案は、そのプロジェクト完了に向けて、日英学生会議からの支援を受けます。これは経済的な支援だけでなく、プロジェクト成功の可能性を最大化するためのガイダンスやパートナーシップの連絡先などを提供します。

開催要項

開催スケジュール

2020年度の日英学生会議は当初、開催地を日英で交互に切り替えるという伝統に従って、ロンドンで開催される予定でした。COVID-19の脅威が明らかになり、大

人数の集会や海外旅行を促進する取り組みの中止を余儀なくされました。そのため、2020年春に、会議をオンライン・ズームに移行することを決定しました。

スケジュール

AUG 26	AUG 27	AUG 28	AUG 29	AUG 30	AUG 31
Dr. Dann Mitchell Climate Science	Dr. Adeline Johns-Putra Climate Fiction	Dr. Toshi Arimura Climate Policy	Tokyo Vegan Ms. Zakiya McKenzie Activism	Mr. Patrick Lydon Art and Urban Sustainability	Mr. Roman Krznaric How to Be a Good Ancestor
Break					
Dr. Saher Hasnain Food Security	Dr. Merrill Singer Activism	UK-JP Group Policy-making	2040 Film Screening	Route H Student Outreach	UK-JP Group Presentations
Group Discussion					

ソーシャルメディア



Facebook

過去会議のより詳しい報告
(英語メイン・日本語少々)



Twitter

2020年度会議の登壇者の情報やロンドン開催のパネルディスカッションの様子など諸々
(日本語・英語で発信)



Instagram

直近の会議の様子はストーリー・ハイライトから

イベント

ロンドンイベント

2020年2月29日金曜日の19時から21時（英国時間）にかけて、日英学生会議はUCL学生連合にてイベントを行いました。「気候変動をどう語るか」についての討論は2020年の会議への募集開始を示しました。下記の登壇者が討論に参加しました：

エマ・ローレンス博士-インペリアルカレッジロンドン、グローバルヘルスイノベーション研究所のメンタルヘルスイノベーションフェロー。博士は研究所のためメンタルヘルス方策を指揮するほか、クライメイト・ケアーズという気候変動とメンタルヘルスのプログラムを運営されています。また、若者のためのメンタルヘルス慈善団体であるイット・ゲッツ・ブライターを設立し、現在も評議員として活動されています。

フレイサー・マイヤーズ氏-オンライン雑誌スパイクトの記者、スパイクトのポッドキャストの製作者。彼は民主主義と言論の自由のための運動を行っており、スパイクトの#フリー・ザ・プレスキャンペーンの調整役を担われました。

シャーラー・アリ博士-緑の党国内問題代弁者・副党首（2014-2016年）、英国議会政党で初めての黒人・少数民族の副党首。博士は欧州議会にて研究者として働いたのち環境政治に携わるようになりました。彼は嘘と欺瞞の倫理に取り組んだ哲学の博士号を保持し2つの環境政治

についての人気の本の著者でいらっやいます。

登壇者は気候変動の悲痛や気候変動への不安心理、現象学について触れました。質疑応答では、参加者が科学と政治の間の緊張や気候ガバナンスと否定論について重要な論点を挙げました。UCLヤング・グリーンズ・ソサエティー、特にネシー・ホールさまからの協力と会場の提供に心から感謝いたします。

Haleigh Kling

東京イベント

日英学生会議は、2020年4月19日（日）15:00-17:00に開催された、東大2020オンライン国際系団体合同新歓に参加しました。このイベントは、主に東京大学を拠点として活動する18の国際系団体が合同で説明会を行い、日本の大学に通う学生に、自分に合った団体を見つけ出す機会を提供するものです。日英学生会議は、3年連続で本イベントに参加しており、前年度会議の報告や団体紹介を含め、毎年8月開催の本会議に向けた団体の認知度向上と、日本側応募者の母集団形成を行っています。当初は東京大学駒場キャンパスでのイベント開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で、オンライン形式での開催に切り替わりました。

本イベントは主に2つのセッションに分かれており、まず前半の1時間で各団体による5分ずつのプレゼンテーションをYouTube Liveにてライブ配信し、後半の1時間で団体別にzoom上で実行委員への質疑応答含めた個別説明会が行われます。日英学生会議は事前のFacebook及びTwitter上の広報で、後半セッションの日本語・英語の両言語での開催を事前にお知らせし、日本側のみならず英国側の学生にも本イベントへの参加を呼びかけることで、包括的な新歓活動を実現しました。

当日は、YouTube Live上で100人以上の学生が日英学生会議のプレゼンを視聴し、弊団体からは実行委員の一人が団体概要や前年度広島開催の会議報告、今年度の「気候変動」をテーマにした本会議の応募方法等に関する説明を行いました。後半の個別説明会では、実行委員そして

2019年度会議参加者数名を交え、学生のより詳細な質問に応答しました。英国側の学生の参加もあったため、英語での団体説明スライドを用いて個別に対応しました。

この新歓イベントを通じて、国際系団体としての日英学生会議の認知度が向上したことを実感しています。前年度比で、本年度会議への応募者数が50%増加したデータもあり、当該イベントがその増加に幾分か貢献したと考えています。また、来年度以降の弊会議へ向けた母集団形成も同時に図れたと考えており、中長期的にその結果が表れると確信しています。

Kanako Hara



事前学習

参加者が気候変動についての資料を熟読し、他の参加者とディスカッションを行うことを通して議題について考える機会である事前学習のアカデミックな重要性は高いです。ディスカッションは、Zoomを通じて開催され、Google ジャムボードを話すことにためらいのある参加者に動機付けを行うための助けとして用いました。また、事前学習には、参加者が6人から8人程度の小さいグループに分かれて話すことで、お互いに打ちとけ合うことを促すという社交的な役割もあります。事前学習、そして会議中に行われるグループディスカッションでは、毎回グループを構成するメンバーを変えて、参加者の交流がより広がる様工夫しました。

第一回事前学習会

第一回事前学習会では、地球と人類の時代を中心に議論を展開しました。産業革命時代以降の人類の活動ー森林伐採、自然の大規模改変、自動車や飛行機の普及などーは自然の循環に介入しており、人間の力が地質学的に無視できない状態になっています。長期的な気候変動の問題は、人間の時間の感覚を超えるスケールで理解することが必要だと一般的に言われています。短期的な成果主義に陥ることなく、また短絡的な対処法に止まることなく、長期的視野から根本的な環境対策を進めていくことが必要であるとされています。私たちは、以下を含む質問をもとに議論を交わしました。

- 世界は『人新世』に突入したのか？
- 人間以外の生物で、何が地質に作用しているのか？
- 気候科学はどう利用されてきたか？

第二回事前学習会

第二回事前学習会では、産業革命前後のエネルギー体制について討論をしました。化石燃料を利用することで、繁栄と生産力の時代がもたらされました。事前学習では、化石燃料の概念の時代的変遷や、化石燃料の破壊性見解について分析しました。私たちは以下の質問をもとに、エネルギーの転換を取り巻く政治的な選択を触れました。

- なぜ二酸化炭素排出量を気にしなければならないのか？
- 天然資源は国のものか、個人のものか？
- 再生可能エネルギーへ回帰することによって、環境破壊は妨げられるのか？

リーディングリスト

チャクラバルティ・D (2009) 気候の歴史：4つの仮説 クリティカル・インクワイアリー 35(2), 197-222
リッチ・N 失われゆく地球：気候変動が止まりかけた10年 ニューヨークタイムズマガジン, 1.
セイガー・A (2020) 2030からの旅立ち：地球規模の疫病の流行がもたらした気候変動に対処する上での教訓 スタンフォード大学社会科学発明批評
クレイトン・J (2020) 炭素排出：驚くべきイギリスの化石燃料への支援 BBC
ハーディング・R (2020) 日本が途上国への石炭燃料の財政支援の削減を発表 ファイナンシャル タイムズ
リヴァル・L (2010) エクアドルのヤスニーITT イニシアティブ：石油の価値の今昔
エコロジカル・エコノミクス 70(2) 358-365
リグレーE.A. エネルギーとイギリス産業革命 フィロソフィカル トランスアクションズ シリーズA 数学的、物理学的、エンジニアリングの科学 371/1986, pp.1-10

Dann



Mitchell

ダン・ミッチェル博士は、ブリストル大学の大気科学の准教授として教鞭をとる一方、NERC研究員として、大気循環、極端な気象現象、および人間の健康に関する気候変動の影響の研究を専門としています。地球温暖化の科学的説明、そして、パリ協定に基づく温室効果ガスの低排出型の社会経済活動の影響を中心に講演されました。

気候変動とは何か、そして気候変動による生活環境への影響についての説明から日英学生会議が始まりました。ミッチェル博士は講義で、気候変動の起源が80年代の自然科学に由来しているにも関わらず、今日の気候変動問題は極めて複雑になってきていることを提起されました。また、気候変動の危機的状況は環境の問題だけでなく、健康、法律、公共政策の問題となっていると述べられました。

この講義では、気候変動の自然的要因と人為的要因の違いについての説明を受けました。産業革命以降の人間活動による化石燃料の大規模な使用といった人為的要因が地球温暖化を促進させており、私たちの生活様式転換の緊急性が求められていると、ミッチェル博士は訴えられました。また、環境破壊がもたらす様々な悪影響についての多岐にわたる分野での研究結果が発表されているにも関わらず、多くの政治家はグリーンエネルギーや低炭素排出技術の研究と発展への公的資金使用の必要性を十分に理解していないと批判されました。

ミッチェル博士は、気候変動が地球上のすべての生き物に影響を与える可能性についても言及されました。地球温暖化による海面上昇、海洋酸性化、熱帯低気圧の激化、激しい熱波などの影響は加速状況にある中、そのスピードを遅らせるために、今すぐ対策をとる必要があると述べられました。

最後に「なぜ気候変動に関心を持つことが大切なのか」という質問に対し、ミッ

チェル博士は、今後数年で、自然や環境に配慮した消費生活を送ることが求められるからだと答えられました。今こそ、日常生活の中で環境保全のために実行できる具体的な方策を練ることが大切だと改めて考えさせられました。

Gabriel Figueiredo

Saheer



Hasnain

サーハ・ハスナイン氏は、オックスフォード大学環境変動機構のフードシステム改革プロジェクトの一つである Foresight4Food Initiative の研究を務めておられます。世界規模のフードシステムの傾向と実現可能な未来を深く理解し、フードシステムの利害関係者間の情報に基づいた戦略的な意思決定を促すメカニズムの開発に焦点を当てています。

サーハ・ハスナイン氏は講演を彼女が携わっているForesight4Foodを考慮に入れて始められました。その構想は見通しとシナリオ、つまりどのように様々な領域のフードシステムが気候変動に影響されているか、そしてどのようにそれらが気候変動に順応すべきかを考え、社会に広めることを目指していました。この国際的な試みは特別な強調を先見性の学びを総合することと情報機関において国際的な団体を含むフードエキスパートと研究者の協同を強化することに置いています。これを達成するために、ハスナイン氏と同僚らは加工、配分、保管、小売りなどの要素を統合することで生産と消費を超えるフードシステムのアプローチを採用し、数えきれないほどの活動家に関わっています。そのような複雑さが変化の大きな可能性を明らかにしました。ハスナイン氏は「全ての人が、いかなる時にも、活動的で健康的な生活に必要な食生活上のニーズと嗜好を満たすために、十分に安全かつ栄養ある食料を、物理的、社会的及び経済的にも入手可能であるときに達成される状況。」という国連のフードセキュリティの定義を利用しています。彼女はそのような安定に到達することは豊かな国であっても極めて難しいと説明されました。これは部分的には私たちが生活するために必要な食べ物と私たちが生産しているものの不整合によるもので、例えば健康的な食事が沢山の果物や野菜から成っていることは自明ですが、でんぷんは最も高い成果を出す食物のカテゴリーです。これは多数の重なった状態である栄養失調、栄養のない食べ物によって起こされる十分でなかったり極端なであったりするカロリーを導きました。気候変動は滝の流れのパターンを混乱させたり、平均気温を上昇させたり、より激しい天気の出来事を引き起こすように、フードセキュリティと親密に結び

ついています。実質的に恵まれない人々はより多くの彼らの収入を食べ物に使い、これは費用を負担できることにおける価格の変動が栄養失調を悪化させていることを意味します。これらは収入における態度が健康から教育に変えられるという不釣り合いに女性に影響しがちな結果である小滝効果ももっています。このようなフードセキュリティへのリスクは増加している闘争やもろさによって更に悪化させられ、更に、気候変動もヒートウェーブの間に殺虫剤の残余、海の生態毒素、そしてカビ毒と同じように病原性のバクテリアを増加させることによってフードセキュリティに影響するかもしれません。では、どのようにフードシステムアプローチはこれらの問題に応じることができるのでしょうか？それはそれによって彼らがショックを緩和し、それらから回復するシステムの回復力の増加を提案します。これは水の管理と生産者への保護を向上するのと同じく、より多くの遺伝的に様々な作物、特にストレス耐性の多様性を持つことによって達成されるでしょう。これらは制度設計や国家貿易政策に大きく依存しています。ハスナイン氏が述べたように、「大きな絵の視点を持つことはあなたがとても小さく見えるけどもいつかある時点でそのうち大きな累積する効果を持つ仲介を選ぶようにするかもしれない」。彼女の講義から学んだ重要なことは複雑なものにしりごみしないことです、例えば食べ物の選択は彼らの文化的、地理的環境に大きく依存しています。どのような一般化もなされるべきではありません。むしろ、私たちは個別的、明確で、そして効果的な公共政策の実施を受け入れるデータにおける多様性のより大きな必要性を受け入れなければならないでしょう。

Madalina Benderschi

Adeline



Johns-Putra

アデリン・ジョン・パトラ博士は、イギリスとアイルランドの文学環境会の元会長を務められた後、現在は西交利物浦大学 (Xi'an Jiaotong Liverpool University) の教授をされています。パトラ博士の講義の要は、気候変動フィクションの台頭、その主要なテーマ、そして気候変動を対処する上でそれが果たしうる可能な役割についてでした。また、気候変動フィクションで、気候変動による将来世代の影響への懸念がどう表現されているかにフォーカスが置かれました。

2日目はアデリン・ジョン・パトラ博士の気候変動フィクションに関する話をお伺いしました。このレクチャーでは、環境問題に取り組むにあたって、科学的なデータのみからではなく、感情的かつ様々な思いを巡らせながら熟考するフィクションからのアプローチという方法論を知り、新たな視点を獲得することができました。パトラ博士は気候変動フィクションを通じて、環境に関する話題や環境問題の持つ難しさ、解決のための道筋に関してどのように対話がなされていくべきなのか、という点についてご教授くださいました。フィクションのタイトルだけに注目しても、多くのことが分かります。1960年代から続く気候変動フィクションの歴史を鑑みると、人間を取り巻く環境が変化するにつれて、フィクションが我々に与えるメッセージやそのタイトルも変わっているからです。最近のタイトルでは、“水の思い出”や“いつ分かる？”といったものが挙げられ、過去のタイトルと比べ、より迫りくる危機を感じさせます。

また、気候変動フィクションを書くことの難しさとして、物語と科学とのバランスを保たなければならないという特徴や複雑さが挙げられました。物語は我々読者を感情的にさせ、科学は理性で考える機会を与えます。そのため、環境問題を考えるにあたっては、どちらかだけでは不十分であり、両者ともに重要な要素なのです。気候変動フィクションは、読むことを通じて、読者にその環境が抱えている現状を理解させ、読んだ後には、課題について自らのこれまでの経験と照らし合わせながら、再考する機会を与えてくれます。こうした効果

は、物語を通じて抱く共感や事実らしさにより、もたらされるものであるそうです。

最後に、パトラ博士は気候変動フィクションの今後の方向性と次のメッセージでレクチャーを閉じられました。“あなた方は未来と地球を担う一員なのです”。世代を超えた問題意識、我々の子孫が生きる未来への懸念をもとに現在と未来をつなぎ、環境問題を惑星という大きな規模で考えることの重要性は、我々参加者の心に大きく響いたことでしょう。

パトラ博士のレクチャーの後のグループディスカッションでは、気候変動フィクションから我々は何を知りたいか、得たいか、という観点から議論をしました。私にとって最も印象深かった意見は、より積極的な行動が促されるように、深刻な結末よりも、ハッピーエンドが良いのではないかというものでした。環境問題を悲観的ではなく、より肯定的に、変えられる未来として考えたいという意見は、日本で環境問題を教える際に挙げられる大きな懸念と一致するところかもしれません。その懸念とは、子どもたちに未来への絶望感を抱かせるかもしれないというものです。こうした意見から議論は展開し、私のグループでは、イギリスと日本の教育過程における現状を踏まえ、環境問題についての教育のより建設的な方法について話し合うことができました。気候変動フィクションは、環境教育という観点からも、多くの示唆を与えてくれるものでした。

Momoko Tajima

Merrill



Singer

メリル・シンガー博士は、コネチカット大学人類学部の名誉教授です。シンガー博士は、感染症、気候変動、健康格差における構造的および社会的要因を専門分野とする医療人類学者です。これまでに34冊の本と200以上の論文を執筆されました。2018年に出版された本 *Climate Change and Social Inequality: The Health and Social Costs of Global Warming* 『気候変動と社会的不平等、地球温暖化による健康と社会への影響』に焦点を当てたお話を伺いました。

この日はシンガー博士が事前に用意し参加者に配布されていた「若者と気候変動のアクティビズム」についてのプレゼンテーションをもとにした議論から始まりました。始めに、プレゼンテーションで何度も述べられていた、どのように社会を変えていくか？という問いを取り上げました。そして参加者は緩やかな変化または急激な変化、どちらをとりたいかについて考えました。それぞれの強みと弱みを比較し、両方を同時に取ることの可能性についても追求しました。もう1つの変化の側面として、社会構造の完全な変化と現在の状態に基づいた社会の修正の違いについて議論しました。生活の質の低下が起こらない社会変革は歓迎されやすい傾向にあるものの、そのための資源が不足する可能性があることについても言及されました。

次に英国と日本それぞれで気候変動の社会運動がどのように行われているかについて議論しました。日本側の参加者は若者の参加率が上昇しているものの、このような社会運動は人気ではないという意見で一致しました。そして社会運動の広がり妨げる数々の日本社会の性質—協調性が求められていること、急進派と捉えられることへの恐怖、同一人種の社会が日本人を国際問題に共感しづらくさせている事実などを挙げました。「意識高い系」という良いことをする人をからかう若者言葉からも分かる様に、コミュニティの中で悪目立ちしてしまうことを恐れる文化があるのかもしれませんが。一方、英国側の参加者は気候変動の社会運動が多様性に欠けている事を指摘しました。下層階級に属する人々は、持続可能な製品は高価で購入することが難しいなど

して社会運動に参加しづらいという現実があります。この議論は日本人である私にとって、日本社会の問題—先住民族や在日韓国人、中国人、移民などの少数民族の代表参加が少ないことに改めて気づきかけにもなりました。しかし、高齢化とグローバル化の影響で日本の社会は急速に多様になりつつあります。この議論を通じて、日本は気候変動に限らず様々なことを英国から学ぶことができるのではないかと考えました。

後半はシンガー博士をお呼びして議論をさらに深めました。彼は完全な社会変革対社会の修正の問題に対して、現在の状況に基づいた社会の修正では気候変動問題の解決に限度がある事を説明しました。そして段階的な修正は権力者に好まれやすく、グリーンウォッシングの危険性や環境資本主義の信用性について懸念を示しました。代替案として彼はグローバル気候正義と持続可能な社会システムを中心とした、エコ社会主義を提案しました。そして、政策作成者に気候変動への対策を取る様呼びかけるために何をすれば良いかという問いに、1人ではなく集団で行動する事、自分の周りの人から一緒に運動を作っていく事が大事だと博士に答えていただきました。これはまだ行動を起こしていない人々を巻き込むことにもつながることだと考えます。シンガー博士が教えてくださったことは、参加者全員に日英学生会議の様なプラットフォームにて草の根からの議論を行う意味を改めて強く感じさせました。

An Yokota

Toshi



Arimura

有村俊秀博士は、早稲田大学環境経済学の教授を務められており、気候変動、エネルギー政策、大気汚染規制と意識的な環境行動について研究をされております。東京大学で歴史と科学の学士号、筑波大学で環境科学の修士号、ミネソタ大学で経済学の博士号を取得されました。有村博士は、日本政府の様々な委員会で環境問題に取り組んでこられました。

8月28日の会議は有村俊秀博士による政策と固体廃棄物処理についての「Climate Policy in Japan: A Role of Carbon Pricing」

（日本における気候政策：カーボンプライシング（炭素価格付け）の役割）という題の講演で始まりました。これが初めての日本に注目した講演だったため、新しい視点を得ることが出来ました。また、博士の講演はカーボンプライシング、排出取引計画(ETS)などを含む環境経済に関連していました。会議の参加者のおおよそ半分が日本人でしたが、これらの情報はほとんどの人にとって目新しいもので、興味深かったです。更に、私たちは気候変動を経済という気候変動を引き起こしているように見えるものを使って防ぐ可能性について学ぶことが出来、驚くとともに多くの政府もこの可能性を理解する必要があると実感しました。

有村博士はJapanese GHG Emission and Target（日本の温室効果ガス排出と計画）という温室効果ガスの排出を2030年までに26%削減するという計画についても言及しました。この計画は2011年の3.11以降困難に直面しており、その理由としては日本において原子力を使うことが難しくなり、それが石炭の使用の増加を引き起こしているということが挙げられます。

カーボンプライシングと排出取引計画がこの講演の重要な要素でした。そのため、このレポートではこれら二つのことについて述べます。初めに、カーボンプライシングについてです。カーボンプライシングとは二酸化炭素の排出に価格をつける考えであり、それによって市場に

導入する方法です。カーボンプライシングは(1)燃料の変化(2)エネルギー効率の促進(3)形式の変化(4)再生可能エネルギーの促進、という4つの役割を担っています。それらによって、人々が石炭の使用をやめ、また公共交通機関の使用をする傾向になるだろうと予想されるからです。この方法で、私たちは二酸化炭素の排出をマーケットシステムとともに減らすことが出来ます。

二つ目に、排出取引計画についてです。大きな印象を与えたことは日本において成功している東京と埼玉で行われている排出取引計画政策です。しかし、この排出取引計画政策が効果的で成功しているように見えても、これを日本中に導入することはできません。それには東日本と西日本における電源周波数の違いや、電気を送ることのできない海峡の存在、都市と地方の違い、それぞれの地方に位置する産業の類など、実現を妨げるいくつかの理由があります。海峡について、電気を送る方法を作れば解決できると考えるかもしれませんが、私たちはこの講演から、それには莫大な予算が必要となるため実行できないということも学びました。この講演から私たちは日本の気候政策の良い点と悪い点を学びました。私たちの世代に何ができるのか考えることが重要です。

Mizuho Ina

Tokyo



Vegan

岩本ゆかり氏は、ヴィーガン東京のサービスデザイナーで、イギリス、アメリカ、インド、そして日本でのヴィーガンアクティヴィズムと持続可能性プロジェクトに関わった経験をお持ちです。ナディア・マッケンジー氏は、東京に活動基盤を置く、英語学習の本や教材の作者、ナレーターです。マッケンジー氏は、ベジ議連という2019年に発足した議員と関連団体で構成される超党派委員会の会員です。この議連は、日本のヴィーガンとベジタリアンの旅行者、消費者の需要に対する認知度の低さに対応するために設置されました。この議連とともに、岩本氏とマッケンジー氏は、ヴィーガン共同体が日本に広がり、世界全体の共同体と繋がることを目標とされています。

ヴィーガン東京によるレクチャーは、我々日本人がいかに関しヴィーガンに関して無知であり、ヴィーガンの人々が日本社会でどれだけ生きづらさを感じているのか、ということを感じさせられた点で、大変貴重なお話でした。現在の日本社会では、ヴィーガンに対する認知度が低いことから、ヴィーガンの人々の選択は、単なる嗜好ではなく、持続可能な社会の実現をも見据えたものであることを多くの人は知らずにいます。この認知度の低さは、日英学生会議全体を通じて我々が議論してきたように、日本における環境問題への関心の低さと運動の少なさから生じているものといえます。私も恥ずかしながら、これまでヴィーガンについて詳しく知る機会やヴィーガンの人々と接することがなく、全くの無知でした。

レクチャーや議論のなかで私が特に印象に残っているのは、ヴィーガンの人々の日本での生きづらさや日本社会には彼らを十分に受け入れる体制が整っていないことを感じさせる二つのエピソードです。一つは、日本の大学に留学経験のあるイギリスの参加者が話してくれた日本滞在中の出来事です。彼女は、日本の友人との飲み会で、お店で出される料理で食べることができず、いつもきゅうりとトマトだけだったそうです。日本の多くの飲食店では、ヴィーガンの人のための料理が用意されていないからです。訪日旅行客も日本でヴィーガン向けの料理を探すことの難しさを感じているといいます。しかし、現在、日本の政治家がオリンピックの開催にあたり、より多くの外国人に来日してもらえるよう、ヴィーガンを促進する活動を行っており、状況は少しずつ改善されつつもあるそうです。オリンピックを機に、より多く

の日本人がヴィーガンへの理解を深め、ヴィーガンフードを扱うお店が増えるなど、より多様性に寛容な日本社会になることに期待するばかりです。

もう一つのエピソードは、日本での学校給食です。給食は日本文化として戦後から続いており、生徒は皆、健康に配慮された同じ料理を食べ、それ以外の食べ物という選択肢は設けられていません。日本の学校給食という制度のなかで育ってきた私自身、これまで給食制度を疑問視したことは全くなく、当たり前、子どもたちにとって良いものとして捉えていました。それは、ヴィーガンの人々にとっては、選択の余地がなく、皆と同じく出された料理を食べるという給食には、辛さを感じることを知らなかったからです。これらのエピソードから、まさに他者の事情や考えを知らなければ、社会の現状や制度に問いを投げかけ、再考することすらできない、ということを感じました。

ヴィーガン東京は現在、日本でヴィーガンについての理解や認知度を高めるために精力的に活動されています。今回のお話を伺い、私もまずは自ら知ることから始め、周りの人々に情報を広めていく、といった形で自分にできることから行動を起こしていくことで、より良い新たな日本社会を創造したいと考えています。私たち一人ひとりがヴィーガンという選択肢の背景にある理由をきちんと知ることが大きな意味を持つことでしょう。我々日本人の参加者にとって、今回のレクチャーはヴィーガンという観点から日本社会のあり方を熟考し直す貴重な機会でした。

Momoko Tajima

Zakiya



McKenzie

ザキヤ・マッケンジー氏は、ブリストルに活動基盤を置く作家で、研究者です。ザキヤ氏は、2019年Forestry Englandのライター・イン・レジデンスで、2017年のBristol Black and Greenの大使です。ザキヤ氏は現在、エクセター大学で、戦後のイギリスにおける黒人ジャーナリズムの博士号取得に向けて執筆を行っています。また、ザキヤ氏は、ブリストルにあるラジオUJIMA98FMのボランティア活動を通し、子供達にカリブ海の話を読み聞かせするなど、自然を重視した芸術や執筆のワークショップを主催していらっしゃいます。

これまでの講義で度々示唆されたように、環境学は多岐の分野にわたり、非常に複雑な研究分野です。環境問題を解決するには、多角的で多面的な視野を持つて取り組む姿勢が必要だと教わりました。マッケンジー氏は、存在する環境問題の議論に、マイノリティの役割からみた新たな視点を提起し、多角的な議論展開をもたらされました。

環境の危機的状況を脱するためには、自然とのふれあいや様々な環境保全活動を通して人と環境、人と人の連帯感を築くことがとても大事だと述べられました。

マッケンジー氏の活動の一つであるBlack Green Ambassador Programmeについて説明を受けた時、そのような環境保全活動の重要性が明白になりました。この活動では、若者が自然とふれあい、価値観を共有することで、現代社会における自然活動の必要性について気づくことを目的としています。この気づきのプロセスの結果、私たちは生物多様性と環境サイクルを保護する理由についての理解と責任を感じるようになるといいます。このように、若者をこのような経験をもたらすことで、教育のあらゆるレベルで環境問題を考慮に入れ、成長したときに議論を巻き起こす可能性が高くなります。政治システムにおける代表の欠如には落胆しているが、彼らは経験的なつながりを通してこの状況を変えようとするより多くの理由があると述べられました。

また、マッケンジー氏の活動するこのプログラムには、代表性がないだけでな

く、「環境保護論者」という概念からも脱却しています。英国の大多数の人々は都市部に住み、自然にふれあわない生活をしている彼らにとって、自然とのふれあいは環境行動主義への基本的な第一歩です。しかし、マッケンジー氏は、人々が天然資源を大切にし、その価値を理解している地域に住むジャマイカの彼女の家族に触発されましたが、彼らは自分たちを環境保護主義者とは考えていません。大都市の住人が普段持っていない自然に近い、周囲を守る必要があるからです。

講義中に提起された最も重要な批判の1つは、気候変動について話すときは常に数字が優勢であることでした。マッケンジー氏は、政策立案者は議論の人間的な側面に耳を傾ける傾向がなく、ソリューションがこの視点をどのように組み込む必要があるかについても述べました。気候危機を食い止めるためには、長期的な協力が必要であり、国民の意識を高めることが重要な第一歩だと感じました。

Gabriel Figueiredo

受賞歴のあるデイモン・ガモー監督の映画2040は「事実に基づいた夢の練習」とも呼ばれ、2040年に36歳になった愛娘に宛てた視覚的な手紙として構成されています。ガモーは世界中を旅して、気候変動の緩和に貢献できる数多くのアプローチや解決策を調査し、それらが実施された場所での未来がどのようなものになるかを想像しています。

8月29日に私たちは「2040」という映画の上演を行いました。この映画は受賞歴のあるデイモン・ガモー監督によって2019年に作られ、彼の4歳の娘にこれから何が起こるか、将来、特に2040年に世界がどう変化しているかを見せる手紙のような構成をしています。主にこの映画は環境問題について将来の科学技術がよりよい世界を作ることを助け、気候変動を防ぐだろうと楽観的でした。私たちはこの会議では主に講演を聞いていたため、このテーマに関する映画を見ることで異なる視点を得ることができ、また映画を含む芸術がいかに関心を持ち、学ぶことが出来ました。更に、他の講演で気候変動への取り組みに対する問題や困難が沢山あるということも聞いていても、この映画が前向きであることによって環境に優しい未来の社会の可能性を見ることができました。

この映画では、ガモー監督が娘に未来を教えるために世界中を旅します。そのため、私たちは彼の冒険を通して今日の技術やシステムと比較された未来の技術の例を学ぶことが出来ました。例えば、緑とテクノロジーに満ちた都市、新しい、を消すなどが取り上げられました。特に、ごみ箱の代わりに土の入ったボックスを取り入れるというアイデアは簡単に取り入れることができ、更に環境と社会に強い影響力を持

つので魅力的でした。この映画を見ることで、気候変動の問題というのは科学、政治のみの問題ではなく、社会や共同体の問題でもあると学ぶことが出来ると思います。したがって、何が起きていて、私たちに何が出来るかということを経験的な人々に教えるためにもこのような種類の映画を作ることは重要だと感じました。

私たちは2040の上演後、たとえ素晴らしい技術を持っていても、環境に優しい未来を実現するためには政府などにそれらを使うことを決定するよいリーダーが必要であるなどと議論を行いました。また、映画の中ではすべての国が高いレベルの科学技術を持っていますが、実際には政治や経済の問題により難しいだろうとも話し合いました。しかし、私たちは次の世代のためにより良い世界を作ることが出来るという可能性があることを知り、嬉しく感じました。私たちはこの映画にあったような未来があることを願っています。更に、私たちに何ができ、なにをすべきなのか考えるために気候変動アクションの良い面と悪い面の両方を知っておくことは利益となるため、この2040の上演は私たちの役割を考える素晴らしい機会になったと思います。

Mizuho Ina

Patrick



Lydon

パトリック・ライドン氏は、作家、環境芸術家です。ライドン氏の作品は、環境との関係構築における持続可能な街づくりを示唆します。シリコンバレーで数十年務めたのち、東アジアとスコットランドの農家、哲学者、僧侶から学ぶ年月を過ごされました。エジンバラ大学在学中に、環境保全を訴える映画 *Final Straw: Food, Earth, Happiness* を共同監督されました。現在は大阪在住で、City as Nature Project を通して地域的、国際的に作品を制作・発表されています。

この講義のタイトルは「都市建築」でしたが、会議のこのセクションで取り上げたトピックはさらに進んでいた。様々なテーマが取り上げられた。活動家としての芸術、食料システム、輸送、そして小さな変化がどのように炭素排出量を削減できるかだ。さらに、ライドン氏ははまた、日本の小さな町に住んでいた彼自身の経験と、近所の生活が彼に他の場所でできる可能性のある変化について考えさせた方法について話した。

講演中にライドン氏が言及したプロジェクトの中には、「世界で最も遅いレストラン」と「自然としての都市」があった。一つ目は、キッチンに食材がないことを知ったときのお客さまの反応を見るための社会実験だったが、裏庭に自分で野菜を植えて、数ヶ月後に帰ってくる必要があった。当然、多くのお客様は驚き、立ち去りたいと思っていたが、残ったお客様は、野菜の植え方や栽培方法についてのワークショップを行い、スーパーや他のお店への行き方を深く理解できた。後者は、大都市と自然の融合がどのように見えるかを示す美術展だった。これらは両方とも同じ目的を持っていた：人を自然に近づけることだ。

講義の解決策の部分に関しては、二つの主な焦点があった：食物と輸送。ライドン氏は、大衆が革命的な技術に大きく依存していると主張したが、それでも、特定の問題を解決するには簡単なアプローチを取る必要があると示思われる。例えば、農業生態学の原則（長年の先住民の

知識で開発された）に基づいて農業システムを変更することにより、土壌は大気中の二酸化炭素の大部分を吸収することができる。さらに、社会とし植物中心の食事に移行することは、汚染ガスの排出を削減することにつながるもう一つの要因になる。交通機関に関しては、自動車の使用をできるだけ減らすために、人々はもっと歩いたり自転車に乗ったりするべきであるという解決策が提起された。

講演の最後に、ライドン氏は社会の中で変化を起こすために「持続可能な考え方」の重要性を強調した。例えば、物体の耐久性とその循環、食事が人や環境にどのように影響するかなどについて、より深く考えることが必要だ。この考え方が生まれる必要性は、一度確立されると、それは社会的関係を通して反響し、広まるということだ。うまくいけば、ボトムアップな方式で、それは政策立案者に届き、気候危機の議論におけるゲームチェンジャーとなるだろう。

Gabriel Figueiredo

Roman



Krznaric

ローマン・クルツナリック氏は、哲学者、文化思考者であり、スクール・オブ・ライフの創始者です。クルツナリック氏の代表作の一つである The Wonderbox: Curious Histories of How to Live 『生活の発見 場所と時代をめぐる驚くべき歴史の旅』は20カ国語以上に翻訳・出版されています。本会議では、最新作である、How to Be a Good Ancestor 『良い先祖になる方法』の中で述べられた、人間の長期的思考の限界について、参加者と対話をしました。

「妻と私は私たちの11歳の双子に少し変わった誕生日プレゼントを渡すことにしました—選挙権をあげることにしたのです」—クルツナリック氏はこんなユニークな話から講義を始めました。夫妻は子どもたちにどんな候補者がいるのかを説明し、彼らが成長した後の未来のために一番良い働きをしそうな政治家を自由に選ばせました。そして夫妻は双子が選んだ候補者へとそれぞれ投票しました。私たち参加者は、事前学習の際から短期的思考の弊害について議論してきました。しかし、彼が紹介したこの誕生日プレゼントを含む様々な「良い先祖になる方法」は、実際に個人として長期的思考を実践するために何をすれば良いかのヒントを与えてくださり、参加者の心を強く捉えました。

講義の中で特に際立っていたのはクルツナリック氏の「6つの長期的に考える方法」です。まず彼は、私たちの世代は宇宙の時の中では瞬きほどでしかないという考え方の、地質学的年代について話しました。彼は現在生存している人口は77億ほどであるのに対して、まだ生まれていない世代は6.75兆人に上るとの予測を紹介しました。この数字から私たちは、まだ世界を見たことがない世代への責任感を強く感じました。レガシーマインドセットとは、将来の世代に良く覚えられることを意味します。これらは「私たちはさらに気候変動の問題が深刻化した地球を将来世代に残すことが許されるのか」という疑問を感じさせました。このような葛藤が起らないようにする方法が、世代間正義です。彼はフューチャーデザインという高知県のネイティブアメリカンに影響を受けて始まった政策立案プロジェクトを例に挙げました。プロジェクトの参加者は、自分たちが2060年の

住民だと仮定して政策提言を行います。プロジェクトチームによると、このようにすることで人々はより先進的な思考を持つことができるそうです。

4つ目の方法は、人生の長さを超えた時間感覚を持って計画立てることを意味する、大聖堂思考です。例として、クルツナリック氏は2011年の東日本大震災と津波の際女川原子力発電所が大きな事故を起こさなかったことに言及しました。これは原発の設計者が、彼の近所の神社が太古の津波で大きな被害を受けたことを覚えており、津波の脅威から発電所を守るために高台に設計したことが理由でした。彼は次に文明の平均寿命が336年であることを紹介し、文明への様々な見方を勧める全体的予測について話しました。最後の方法は、1つの惑星として生き残ることを導く超越的目標です。それに伴い彼はドーナツ経済学という環境的制限の範囲内での経済活動を目指すモデルを推奨しました。

これらの長期的思考のための方法とともに、クルツナリック氏は緊急性の重要性についても語りました。彼は現在の新型コロナウイルス感染症のパンデミックは急速に人々の人生や子孫についての捉え方を変えていると話しました。そして、今、違う視点を持つ人々と議論を始めることができれば、さらに多くの人々を将来に向けて考え、至急行動することが可能になると述べました。今私たちは長期的思考の社会に変革するための絶好の機会にいるというこの事実、参加者はさらにより良い地球にしていくこと、良い先祖になることを励まされました。

An Yokota

寄付金

8月30日、日英学生会議のメンバーは、英国大学への出願を視野に入れている日本の高校生とのオンラインイベントを開催しました。このイベントでは、当団体の長年のスポンサーであるベネッセ株式会社のRoute H とGlobal Learning Centerにご協力いただきました。今年は、40名以上の高校生そして保護者の方々に出席いただきました。

日英学生会議の理念と今年度の会議内容について簡潔に説明し、未来を担う高校生に我々の活動を広める機会をいただきました。自己紹介の後、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学（UCL、キングスカレッジロンドン、ロイヤルホロウェイ校）、インペリアル・カレッジ・ロンドンに通っている参加者

と委員がそれぞれの大学についてのプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションでは、大学生活、カリキュラム選択、社会活動、大学への出願方法、国際的な活動、コロナウイルスに対する大学の対応まで、様々なことについて話しました。質疑応答では、高校生から、英語の勉強法、出願方法、また課外活動のコツなどについて質問をしてたくさんいただきました。

この機会を与えてくださったRoute Hの尾澤章浩さま、そしてGlobal Learning Centerの辻村慎乃介さまの日英学生会議の活動にご賛同いただき、好奇心に満ちた高校生向けのイベントにご協力くださったことに心から感謝いたします。

スポンサー・協力



会議の詳細

主催者

Madalina Benderschi University College London BSc Anthropology

Ayaka Naota University College London MA Legal and Political Theory

Haleigh Kling City University London MA Cultural Policy and Management

Aidan Gilbert University of Edinburgh BA Japanese Studies

Nicole Doyle University of Oxford BA History and Politics

Kanako Hara University of Cambridge BA Land Economy

Alex Sato University College London BA Law, LLB

Daiki Ito Tokai University BA Law

参加者

Ada Schmidtkunz	King's College London	Disasters, Adaptation and Development
Aki Yamamoto	Keio University	Business and Commerce
An Yokota	King's College London	Foundation Course
Angel Rose	University of Kent	Medieval and Early Modern Studies
Brahma Mohanty	University of Oxford	History
Brannavan Mohan	University of Warwick	Politics, Philosophy and Law
Carine Valarché	University of Cambridge	Human, Social and Political Science
Ceara Webster	University of Warwick	Liberal Arts
Eliana Harrigan	Imperial College London	MSc Environmental Technology
Emily Taylor	University of Exeter	Politics, Philosophy and Economics
Gabriel Figueiredo	Tokyo University of Foreign Studies	International Law
Jin Tanaka	Kyushu University	Environmental Engineering
Kanako Yamagami	Keio University	International Relations
Keigo Matsura	Hosei University	Law & International Politics
Kohei Takasaki	Waseda University	Political Science
Kotaro Akiyama	Hitotsubashi University	Business and Management
Linden Murakami	Royal School of Armagh	

Lisa Evans	University of Cambridge	Law
Lucía Salazar Gómez	London School of Economics	MSc Environmental Policy and Regulation
Mizuho Ina	Nanzan University	British and American Studies
Mizuki Watanabe	Keio University	Econometrics
Momoko Tajima	Kyushu University	Law
Naoki Ishii	Hosei University	Business Administration
Nuala Burnett	London School of Economics	MSc Environmental Policy and Regulation
Riho Kobayashi	Waseda University	Political Economy of International Development
Ryota Imamura	Tokyo University of Foreign Studies	International Society
Sakura Doi	Keio University	Human Science
Sari Nomura	Kyushu University	Interdisciplinary Science and Innovation
Sharman Pandian	King's College London	MSc Climate Change: Environment, Science and Policy
Taichi Asami	Doshisha University	Economics
Tomo Taniguchi	University of Tokyo	Pharmaceutical Science
Yume Araki	Sophia University	International Legal Studies

2020年度本会議収支報告

本会議参加者(予定)

	個数	Exchange Rate (Aug 12)
参加者(日本側)	18	£1 = ¥139
参加者(英国側)	15	
運営数	8	
合計	41	

収入

	1人当たりの予算	個数	合計
参加者	£50	33	£1650
Route H 寄付金	£720	-	£720
Global Learning Centre 寄付金	£360	-	£360
		合計	£2730 / ¥380000

収支

	1人当たりの予算	個数	合計
Event Expenses	£280	-	£280
Film Screening	£200	1	£200
Honorariums	£50	5	£250
Report Contributions	£25	4	£100
Zoom Subscription	£75	1	£75
Student Scholarships	£50	6	£300
Promotion	£100	-	£100
Website and Domain	£60	-	£60
Accommodation Deposit	£2000	-	£2000
		合計	£3365 / ¥468000

終わりに

2020年8月31日をもちまして、第5回日英学生会議の全日程を無事終了いたしました。新型コロナウイルス感染症の影響で、過去4回の会議形式とは異なり、初めてオンラインで開催する運びとなり、開催に至るまでは、会議の実現に漕ぎ着けられるだろうかと幾度も議論を重ねました。このような先の見通せない不確実な状況下にもかかわらず、会議成功へ向け努力を惜しまなかったすべての実行委員、そして一週間の集中的な会議に時間と精力を傾けてくださった参加者の大学生一人一人に、心より感謝申し上げます。知的好奇心を刺激した充実の一週間であったならば幸いです。

また、ご登壇者のDr. Dann Mitchell、Dr. Saher Hasnain、Dr. Adeline Johns-Putra、Dr. Merrill Singer、有村俊秀教授、東京ヴェーガン、Ms. Zakiya McKenzie、Mr. Patrick Lydon、Mr. Roman Krznaricは、多くの考えるきっかけをいただき、御礼申し上げます。ご登壇者の皆様の英知を行動に移して参ります。

さらに、日英学生会議の開催実現は、偏に活動をご理解いただいている多く

の皆様のお力添えのお陰です。特に、経済的にも厳しい今年度も、引き続きご協賛いただいた株式会社ベネッセコーポレーション、Route H、Global Learning Center、そしてご後援いただいたJapan-UK Season of Culture（英国における日本文化年間）の皆様に厚く御礼申し上げます。

最後に、本報告書作成に携わったBenderschi Madalina氏、Figueiredo Gabriel氏、原佳奈子氏、伊奈瑞帆氏、Kling Haleigh氏、田島桃子氏、横田 晏氏に深く感謝いたします。

来年度、2021年日英学生会議は、「倫理とテクノロジー」をテーマに据え開催いたします。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。





日英学生会議
UK-Japan Student Conference

uk.jp.student.conference@gmail.com
www.uk-jpstudentconference.com